

## 人生を拓いてくれた「珠玉の言葉」1974年

1974.5.13

- ・ 日本には、一般に明治維新以降、日本が世界的になったという考えがありますが、私は必ずしもそうは思いません。イギリスの日本文化史の故サニソム卿も明治維新以前の日本文化に、普遍的大きな価値が有ったと書いています。私は明治維新以降、日本は国家主義的になり、世界的にみると狭い心をもつ、地方社会になったのではないかと思います。
- ・ 今日日本人は精神的空虚さを感じています
- ・ 自然と人間の暮らしと、どちらが大事か

1974.5.25 朝日ジャーナルより

- ・ 私は生徒に向かって私のように毎日毎日運動せよと言う。  
私は勉強を一口も言わぬ。笛吹けど踊らずと言う事をいやと言う程経験したし、ひとりことごと踊っていれば何とかなるし、それに近頃は全く踊りを知らない人がかえって笛をよけいに吹く。
- ・ 沢山の生徒を一定の企画品として箱に詰めるのが大好きで、奇人の出現を恐れる
- ・ 捨吉は子供を大人の前身とは考えない。高校生の時代をやがて来るべき大学の進学準備期間だと思わない。
- ・ 教諭の勤務を教頭や校長に昇進せんがための修行とは見ない
- ・ 捨吉は生徒を前にして「諸君は将来有為の人物となって世のため人のため云々」とは言わないことに決めている。
- ・ 捨吉が言いたいのは、まず現実の喜びはどうかねと言うことである。
- ・ 君達に切望したいのは自主独立の精神ばかり
- ・ 教育の目的はすこぶる簡単で、人の子に生の喜びを知らせることだ
- ・ 学用品を忘れるようなことがあっても、お弁当だけは忘れないように
- ・ きまりによって教育の芽をつみとられてしまう
- ・ 教育はあくまでも生徒ひとりひとりの内発する可能性をひき出すものでなくてはならず、全体のために個人が生きる教育はまちがっている。
- ・ 補導栄えて教育枯る
- ・ 当世教師かたぎ 「足並み屋」 「しつけ屋」 「呼び出し屋」
- ・ たとえ非力でも不手際でも、生徒のほころびはクラスの担任が手ずから縫合するにかぎる。ほころびについてだれよりも知り得るものは、おそらく担任教師だからだ。その為に教師はもっと悩むべきだし悩み合って語るべきだと思う。
- ・ 解雇されてはじめて教師になったような気がする

- ・ 今まで幼いものに対してきびしい目を向けがちで、自分も含めて権力とか権威とか見すえる目を持ってなかった。その意味で教師の見習いみたいでした。